

## 『和英語林集成』の成立過程

## —「ヘボン自筆ノート」から初版出版へ—

鈴木 進

明治学院大学図書館には、J. C. ヘボンの書いたノートブックが大切に保存されている。皮装、大型のノート、全体は320枚、そのうち最初の250枚が辞書原稿、次の36枚はローマ字日本語訳 *Mataiden fuku-in sho*、そして最後の一葉は尾上町教会堂建設費用のメモである。このようにこのノートには、日本におけるヘボンの大きな働きのうち、辞書編纂、聖書翻訳、教会建設という三分野にかかわる内容が一冊の中に盛り込まれているのである。

ノート前半の辞書原稿（以下「手稿」とする）はペン書き文字の書き直し、訂正、エンピツによる加筆など、ヘボンの辞書作りにおける試行錯誤の跡が残されている。それらに注目しつつ、初版本（1867）と比較検討することによって『和英語林集成』の成立過程を検証してみよう。

ヘボンは辞書編纂の目的と対象を初版本の序言に (1) *all foreigners in Japan* (2) *special business to share their acquisition with others* と記している。利用者は本来「在日外国人」であり、「特別の任務」とは聖書と訳にあるいは日本宣教のため（ゴープル『摩太傳福音書』翻訳の例【川島第二郎氏の指摘】）がそのひとつであった。このような編集方針は原稿の段階「手稿」においてすでに明らかに見られる。

外国人の利用を目的としているという特徴は(1) 見出し語（アルファベット順）および用例の日本語のローマ字表記 (2) 語義、定義を英語で説明 (3) 活用語の語尾変化 (4) 英日文化の違いを理解させるため、日本の風習に関する語（*Haguro* 鐵漿 *Kaishaku* 介錯など）また視覚的な図解の試みにもあらわれている。

「手稿」と初版とではどのような改良、整備が見られるか。まず見出し語の立て方、「手稿」におい

ては見出し語にアクセント記号を付したのも少数あり、また見出し語のみで、その定義、用例のない語も多い。それに対して初版本では (1) 見出し語のローマ字（「手稿」のそれらが変化した表記法もある。アクセントは不採用。ハイフンを用いて分節）に片仮名が加わった。英語を和語に言換える、なども。

収録項目の多様性ということもこの辞書の特徴といえよう。高貴なことばから、辞書に載せるのは憚られると思うような卑語俗語に至るまで幅広く載っている。来日外国人が耳にするであろう語は出来る限り収録しようという姿勢は、前述の編集方針に通じるものがあるのであろう。

しかし意外にも聖書、キリスト教用語の数は少ない。当時の日本語の中に、あるいは日本社会にはそれらに相当することばや概念が存在しなかったということであろうか。それに反し、仏教、神道に関する語は多く、説明も詳しい。ヘボンが日本の宗教を深く研究した証であろう。医療はヘボンの専門分野であるから、人体器管、病名、薬の関連語が豊富なのは当然と言えよう。擬声、擬態語、外来語、江戸ことば、方言を含め、いわば雑多とも思えるこれらの語は「手稿」の段階では単語の収集が主であったためなのか。集まった語は初版を編むに当って、一定に基準に従い、分類、採録したのであろう。

ヘボンの単語収集はどのように行われたのか。施療所での彼の患者や日常生活で接する日本人の口にする言葉をメモしたと思われる語や表現も多い。それらをヘボンが聞きとった通りに、ローマ字で書き記した。*Hitskoi*, *Atoszzari* などは聞き誤ったのであろう。初版には、それぞれ *SHITSZKOI*, *ATO-SHIZARI* と訂正されている。

ヘボンの日本の古典の広範囲な読書に驚嘆させられる。グリフィス『ヘボン・同時代人の見た』にはヘボンの読んだという作品名があがられている。*Kairoo no chigiri*, *Hinniyo ittoo* は『源平盛衰記』からか。また *Hiyameshi*, *Beraboo*, *Goma no hai*, *Chobo*, *Jajam'ma*, などは『膝栗毛』に現れ

る江戸ことばとも一致する。

辞書編纂において最も多くの労力を要するのは語の定義・語訳であろう。ヘボンの場合も、「手稿」の段階においては動植物名などの定義は“a kind of~”, “a name of~”, “a species of~” など大まかな表現であったものが、初版では、それぞれに相当する英語の訳語・ラテン語学名が当てられている語がある。また Ami. a small kind of crab, Haikai 俳諧 a kind of enigma, など、「手稿」における誤りが初版において、それぞれ A small kind of shrimp. A kind of verse or poetry of 17 syllables. と正されている。それとは逆に、Fugu, a kind of fish with a large round belly. とあったのが、初版は FUGU, フグ、河豚、n. The porpoise. としたのは初版で却って改悪してしまった例といえよう。

初版の序文にあげられている先行辞書『日葡辞書』(そのフランス語訳『日仏辞書』)のいずれであったのか、特定出来なかった)から採用したと思われる見出し語は、筆者の調査では 51%、用例では A の部 142、B の部 117 の多数にのぼる。それだけでなく、活用語は、連用形の見出し語に、その終止形、過去形を記しているのは明らかに『日葡辞書』(あるいは『日仏辞書』)に倣ったものといえよう。

ヘボンは来日以来、彼の耳にする日本語、あるいは古典より同時代に及ぶ日本語の書物から、只管単語を集め、ヘボンノート「手稿」(A から K までのみ。K 以下に関しては所在不明)の書き留めた。そしてそこから初版本に採用すべき語を選び、彼の文法基準によって品詞分類し、語法、スピーチレベルをも示した。また綴りの誤りを訂正し多くの語の定義を簡明にして、正確な英語に書き改めている。さらに Syn (同意語)も充実し、語源欄も備わった。上海の地での印刷の段階において、急遽執筆した IN DEX (英和の部)も加わり、近代的な英語辞書の性格を備えた初版本出版に至ったといえよう。

なお、「手稿」をめぐる謎ともいべきその執筆年代については解明できなかった。

## ※お知らせ

『NHKカルチャーラジオ 歴史再発見 ヘボンさんと日本の開化』会員の大西晴樹氏がNHKラジオ第2放送に登場、連続13回の講座。2014 9月30日~12月、火曜日午後8:30~9:00、再放送翌週火曜日午前10:00~10:30

## 事業家長谷川誠三

岡部一興

随分古い話になるが、1968年8月に弘前におけるキリスト教受容というテーマで調査した。弘前に伝道されたキリスト教は、1875(明治8)年10月にメソジスト派の弘前教会を生み出し、続いて藤崎、黒石、五所川原といった周辺の地域にキリスト教が受容されていった。その時、弘前において受容されたキリスト教は、東奥義塾という藩校の伝統を受け継いだ学校にメソジスト派のジョン・イングという宣教師が着任し、そこから受洗者が続出し、弘前バンドと言われる集団を生み出した。

そして、藤崎町ではキリスト教と自由民権運動が同時並行的に受容されていった感があった。1886(明治18)年12月に藤崎教会が創立され、やがて独立自給の教会として発展していく。当時の教会は、ミッションの支援によって創立されるのが普通であったが、藤崎教会は創立時から独立自給の教会として発展した点で、注目すべき教会といえる。というのは、佐藤勝三郎、長谷川誠三という二大地主が教会の財政を支えていたということがこの教会を早くから独立自給の教会として発展させることになったのである。

前置きが長くなってしまった。1857(安政)長谷川誠三は長谷川定次郎、タキの長男として藤崎に生まれた。12歳の時藤田立策につき漢籍を購読、14歳でこの塾の主任教授、続いて書道家の平井東堂に師事した。誠三は母親と早く離別し、後妻にも可愛がられた様子もなく、家庭的には恵まれない環境に育ったが、独立心強く、誠実な性格が形成された。

青年時代の誠三を見るに、はじめ政治に関心が強かった。1880(明治13)年弘前を中心として自由民権運動が盛んになり、本多庸一や菊地九郎などを中心として外国人宣教師を招聘し、アメリカの大学と慶応義塾を模範として、東奥義塾なるユニークな学校を創立させ、本多がその校長となった。この東奥義塾の生徒を中心に「共同会」なる政治結社を設立、東奥義塾は民権運動の牙城となり、本多は菊地九郎等と国会開設の建白書を政府に提出するなど青森県の民権運動をリードする存在になって行った。その民権運動は、近隣の藤崎町にも波及し、豪農である

長谷川誠三も民権運動の担い手になっていった。長谷川誠三は藤田匡と藤崎地方の委員となり、誠三は村会議員、総町村連合議員、郡会議員を歴任するなど民権運動に関わった。しかし、官憲と保守派によって民権運動に関わる東奥義塾を攻撃され、1883年自由民権運動の中心的な結社であった「共同会」が解散するに至った。これを契機に長谷川誠三も自己のよりどころを失い、政治から足を洗い事業家へと転換するに至った。

1885年長谷川誠三は義兄弟である佐藤勝三郎と大農経営によるリンゴ園を開園する。敬業社なる会社を設立、7町5反歩の藤崎村真那板縁に苗木を植え、株式会社経営による近代的な大農経営を試み、先駆的な働きをした。村長の清水理兵衛、医者 of 藤田奚疑、本多庸一、菊地九郎らも参加、1896(明治29)年には30円の高配当を出し、長谷川誠三1,050円、佐藤勝三郎900円の配当を出し、金となる木と騒がれ、津軽では明治20年代後半から続々とリンゴ園が開設されていった。

1885年義兄の勝三郎が洗礼を受け、87年6月献堂式当日誠三は妻のいそ、長女他4名と共に洗礼を受けた。彼は受洗するや、村で一、二を争う大酒のみであったが、禁酒を励行し酒造業をやめ味噌醤油製造業に転換し、「禁酒貯蓄会」を立ち上げ会長となり、禁酒運動に邁進、藤崎教会の柱石を担っていった。それ以後の長谷川を捉えると、さまざまな事業に関わったことが指摘できる。彼は教育に心篤く、とりわけ女子教育の遅れに着目し、1886(明治19)年函館遺愛女学校から始まった学校を函館遺愛学校から分離、1888年「女子は文明を生む母なり」に始まる趣意書を作成、結社人となって寄付を集め、開校にこぎつけ校主として学校財政、教育施設、教育内容に至るまで責任を負った。

1894(明治27)年、本多庸一の弟西館武雄の経営する雲雀牧場が経営難に陥るや、これを引き受け事業にあたった。1896年八甲田山田代平地の開墾に着手、地方産業に貢献した。また1897年1月藤崎に銀行の必要なのが分かったと、株式会社組織による藤崎銀行を立ち上げ、頭取となって南津軽郡を中心とする地方金融に貢献した。また同じ年に盛岡から十和田湖の途中にある湯瀬温泉を開発、1888年創立の日本石油の大株主となり、日本4大財閥の安田善次郎の知遇を受け株式の投資家として世間の注目を浴びた。関西の大立者阪神鉄道の島徳蔵と肩を

並べ、「関西に島あり東北に長谷川あり」といわれた。

1906(明治39)年9月長谷川誠三は、メソジスト派を退会、一小教派なるプレマス派に転じた。同年1月プリマス・プレズレン派の首藤新蔵、浅田又三郎といった伝道者がこの地域に来住したのを契機として、教会の二大柱石の一人の長谷川誠三はじめ12名の者が藤崎教会を離脱し、プリマス派に転ずるという事件が起こったのである。プリマス派のことを記すと、1830年J.N.ダービーを中心として監督教会から離れた者がイングランド南西部港町プリマスにあるプロビデンス・チャペルで集会を持ったことに由来する。お互いをプレズレン(兄弟)と呼び合い、「プリマス・プレズレン」なるキリスト者集団を形成した。この派は制度的教会が世俗主義と形式主義に陥ろうとするものに警笛を打ち鳴らす一種のカルヴィニズムから出てきた敬虔主義的な信仰運動であった。日本には1888年11月英国ケンブリッジ大学卒業後、単身で来日したハーバード・G・ブランドによって伝えられた。

なぜ長谷川誠三がメソジスト派から離れてプリマス派に転じたかについては、解明できない部分がある。この問題については紙面が不足するのでここで論ずることはできないので、他日を期したい。いずれにせよ離脱にあたっては本多庸一とのやり取りも見られたが、信仰的な面からこの派に転じていったともと思われる。この派は、現在は同信社として存続している。弘前女学校の設立者の名前は本多庸一となり、長谷川誠三の名前は削除された。

長谷川誠三はさまざまなものに関わっている。1888年石井十次の岡山孤児院に遅れること一年、本郷定次郎が「育児暁星園」(現横浜市三春学園)を立ち上げ、92年栃木県那須野に4町5反歩の土地を得て孤児院施設を作った。誠三は相当の資産を出している。また1902(明治35)年留岡幸助がジョン・ハワードの監獄改良に影響を受け秋吉台に大理石発掘の事業を経営、傍ら出獄人や不良少年を世話し、感化教育に専念していた。その留岡幸助を励まし、この事業を支えていた。1905年凶作と日露戦争による重税は農民の暮らしを一層貧困な状態に陥れた。その時「東奥日報」に「地主諸君に議る」として記事を書き、政府が収入を上げるため小作料を挙げたことに強く反対、自らの小作料を今まで通りに据え置いて農民から歓迎された。

1913(大正2)年東北、北海道は極度の冷害に襲われた。これに対し政府及び県当局は産業資金100万円の県債を起し対処したが、焼け石に水であった。この時誠三は20万円の大金を出し、外米を横浜の米穀商鈴木弁蔵から貨車で50両取寄せ窮民に配った。「凶作慰問伝道」というべきもので、浅田又三郎が北海道函館、小樽、岩見沢、釧路地方まで足を延ばし、小学校の行動や役場の会場で講演会を開き福音を述べ後に出席者に2升、ないし3升の外米を配付した。これらの講演会が契機になって浅田又三郎の集会に集って神の恵みを深く悟り主に導かれたものも出た。1921(大正10)年東奥義塾の再校で資金不足の時、一万円を寄付、また藤崎町に多額の寄付をし小学校のグラウンドを寄贈するなど惜しみなく社会に奉仕する者となったが、よき後継者に恵まれず、1924(大正13)年10月29日たぐいまれな生涯を終えた。68歳、父定次郎とくしきも同一年齢であった。

### 3.1 独立運動とキリスト教

徐 正敏

#### 前提

韓国プロテスタントキリスト教の宣教、受容環境は独特な特徴を持っていたと思う。同時代アジア、アフリカ、ラテンアメリカにおける他の宣教地の状況とは異なる状況として宣教国と帝国主義侵略の国が別であった。すなわち宣教国はアメリカを始めで欧米、政治的には日本帝国の侵略の経験を持つという形であった。このような背景からいわゆる「韓国民族キリスト教」が展開された。代表的なキリスト教界民族運動グループとして「尙洞派」がある。その後1907年「大復興運動」のプロセスで韓国キリスト教は「非民族化」されたという評価もあるが、1911年日本側の韓国キリスト教に対する弾圧事件である「105人事件」をみると韓国キリスト教の民族主義的な傾向性は残存していたと言えらる。

#### 3.1 独立運動の歴史的意義

韓国の3.1独立は、第一、「階級統合的運動」であった。すなわち同時代社会革命運動のようなブルジョア階級との葛藤によるプロレタリア革命などとは異なる全階級が参加した民族運動である。第二、非暴力、平和運動である。第三、韓国の近代歴史に

おいての政治思想の革命的な変化の契機になった。すなわち主権在民の政治思想が始まる契機であった。第四、韓国独立の実現という目標からみると失敗した運動でありながら一方には成功した運動である。その成功の例は朝鮮総督部の「文化統治政策」、「大韓民国上海臨時政府」の樹立などである。

#### 3.1 独立運動においてキリスト教界の役割

韓国近代民族史において、三・一運動ほど大きな歴史的な意味ある事件はない。ところが、その分布や歴史性から見て、新興外来宗教という特性を持ち、当時としては少数宗教にすぎなかったキリスト教会とキリスト人が、この韓国近代史最大の歴史事件の中心に位置していたということは、継続的な論議が求められる。もちろん、三・一独立運動がキリスト教のみの主導と参与によって生じた運動である、あるいは、キリスト教精神とキリスト教の理念が具現される運動であるという意味ではない。実際に、三・一運動は宗教的にも天道教をはじめ、仏教とキリスト教がともに参与し、階層と地域、社会的な階級を問わずに、全民族が共に参与したからこそ、統合的な運動としての意義がより一層深まった。ただ、このような全民族的な大儀と運動の一つの軸として、キリスト教が一定の役割を果たした事実注目する必要がある。このような点こそ、キリスト教の歴史からも意義深く評価されるのである。

三・一独立運動におけるキリスト教の役割は、「運動推進の媒体」と「運動以後の受難」に集約される。まず、キリスト教がどのように運動推進の媒体としての役割を果たしたのか考えてみよう。当時韓国民族には全国、あるいは海外連携の独自チャンネルがほとんどなかった状態であったのに対して、キリスト教は教会組織という全国的なチャンネルを維持していた。また、一部の宣教師や海外派のキリスト者が活動していた海外情報収集の窓口として機能した。これは、非近代的な状況下で、三・一独立運動が全国規模で、比較的一斉に、そして国際的な認識と連携によって推進できた要因となったのである。

次に三・一独立運動にともなう責任について考えてみよう。三・一独立運動は結果的には、失敗した運動である。独立を要求した運動目標の達成には至らなかった。また、日本帝国はこれを不穏な民族主義者による「騒擾事件」と断定した。これによって運動以後、さまざまな形態の報復と責任者の処罰

が実行された。日本帝国によって公式な主導者の捜索と投獄が行われ、刑執行によって各地域別に多数のキリスト者が容疑をかけられ受難にあうという悲劇が起こった。日本帝国による非人道的な行為および報復の虐殺がキリスト教会中心に行われたのである。広く知られていることとして、水原堤岩里教会、狩村里教会、花樹里教会、平南江西の磐石教会、孟山教会、満州のノルバウィ教会などは日本帝国の残虐な行為によって受難した。これは、韓国キリスト教が初期からもっていた民族的社会的なイメージによるものであった。キリスト教会がもつ実質以上のイメージが被害をより大きくしたともいえよう。

一方、三・一独立運動と韓国キリスト教会との関係で特に注目すべき側面が一つある。すでに韓国キリスト教会は1907年の「大復興運動」を経て、歴史的問題、民族問題への関心呼び起こした教会として認識されている。すなわち、歴史参与の側面よりは、個人の救いや内面化により多くの重点を置いたキリスト教の信仰へ変化したとする見解が多かったにもかかわらず、驚くべきことに、そのような「没歴史的」傾向の教会が三・一独立運動のような大規模の民族運動と歴史参与の過程において一つの主体として活動していたのである。単に歴史参与に重点をおいた民族教会的な方向と、個人救いに重点を置くキリスト教とに二分化することによっては理解できない深い神学的な意味がここには含まれているといえよう。

韓国キリスト教会の「信仰内面化過程」は1907年を前後とした「大復興運動」であった。この過程を目途とした参与論者は韓国教会の「非民族化」、「非政治化」を取り上げながら、韓国キリスト教会による民族問題解決をあきらめた。しかし、これもやはり単線的な判断であった。つまり、そのような過程を辿った韓国キリスト教会自体が三・一独立運動で一定の役割を担ったのである。特筆すべきは、三・一独立運動以前の「キリスト教民族運動」の最前線で活躍していた人物とそのリーダーシップが、そのまま三・一独立運動まで継続したケースはきわめて少なく、全体的に宗教的指導者とされていた聖職者がむしろ三・一独立運動のキリスト教指導者群を形成したという点である。このような「内面化」の過程を経た韓国キリスト教会が、具体的な事件である三・一独立運動でより犠牲的であり、受難を担うべき分野で貢献したという結果はやはり意義深い

こととして注目し、傾聴すべき側面である。結局、「イデオロギー的」な敵対感などのような様式ではなく、名実ともに宗教的な形式を備えていた韓国キリスト教が「民族教会」としての機能を担った事実が最も明らかで広範囲な事件の三・一独立運動である。これは、受容初期の韓国キリスト教会に提起されていた「反民族容疑」という歴史的危機を見事に乗り越えた結果とみなすべきである。(徐正敏、『韓国キリスト教史概論-その出会いと葛藤』、かんよう出版、2012、29-31頁)

### 3.1 独立運動に対する日本キリスト教界の反応

「三・一独立運動」は日本の韓国植民地統治三五年の間でもっとも大きな韓国民族の独立運動事件である。しかしこの事件に対する日本当局の認識は、一部不良な韓国人による「騒擾事件」であるといった。それはこの運動の意味を格下げする目的でもあるし、世界の世論を意識したものでもあったといえる。そして、当時の日本クリスチャンの多数意見もほぼ同じである。

もっとも重要なのは、この独立運動の「原因分析」である。その分析の第一として、韓国のクリスチャンをはじめ一部宗教人の不満や間違った信仰の問題が指摘される。特に当時韓国に宣教師として駐在していた渡瀬常吉は韓国キリスト者たちの民族運動、政治的活動を問題視している。

第二の「原因分析」としては、かつてこのように書いた。

「三・一独立運動前後の朝鮮の状況を比較的正確に把握しているとされているキリスト者であり政治学者である吉野作造が、具体的な例をあげて朝鮮総督府による朝鮮統治の限界、朝鮮人に対する政治的、社会的差別構造を詳細に示し批評している。しかしこのような正確な分析においても、三・一独立運動の原因を統治方法の失策や社会的差別、不安心理などと理解しようとする日本側の見方を敷衍しているに過ぎない。」とような内容である。

このような「原因分析」は、結果的に当時韓国人の立場から積極的になされたはずの「独立宣言」を無視して、単に「朝鮮総督部」の「善政」を希望するという水準の理解に止まってしまっている。したがって、その「解決策」も「朝鮮人に対する差別禁

止」レベルで提示されていたと思われる。

吉野作造の見解は、「三・一独立運動」に対する分析として日本クリスチャンの評論の中で一番高い理解水準にあるものと思われる。しかし「三・一独立運動」後の「堤岩里教会事件」をはじめとして、いわゆる「虐殺事件」に対する反応は少し異なったものとなっています。もちろん渡瀬は、このような事件についても一方的に総督府を弁護したが、これについて柏木義円は、反論した。

一部の例外としても、このような具体的な「虐殺事件」に対して、日本クリスチャンの「クリスチャンの良心」人道的判断が表現されているのを確認できると思う。代表的なものが斉藤勇の「詩」である。そして一九一九年七月は、破壊された韓国の教会やクリスチャンのための募金運動もあったことを確認できる。(キリスト教史学会編、『植民地化、デモクラシー、再臨運動-大正期キリスト教の諸相』、教文館、2014、52-60頁参考)。

## 戦時下のキリスト教会と田中剛二の政教分離

吉馴 明子

本報告では、韓国は「抵抗」、日本は「追随」とされてきたキリスト者の国家に対する姿勢について、国家(総督府)の宗教政策を辿りながら再考したい。その流れの中で、南長老教会ミッションを媒介として、中央(神戸)神学校が朝鮮人キリスト者の日本での受け皿となったこと、同校出身の田中剛二が戦争末期に在日朝鮮神戸(林田)教会の代務者となったこと、田中の姿勢から「信教の自由」が、政治的抵抗に転化しうる可能性について考えようと試みた。

### 1. 日韓併合とキリスト教

1910年の日韓併合直後の安岳事件、105人事件では、宣教師を含む多くのキリスト者が逮捕された。それは、日本の植民地支配に少しでも反対する政治活動や独立運動を押さえ込もうとしたからで、キリスト教をもしばしば反対勢力の一翼として敵視された。1919年の三・一独立運動とそれに続く堤岩里事件では、日本人キリスト者にもこれを批判する動きが起こり、国際的な批判によって、政府は総督府

長官を斎藤実に変え「文化統治」へと方針を転換させざるを得なかった。1925年京城南山に市街を睥睨するように朝鮮神宮造営されたが、その時でさえ、当時の総督府の役人は「神社参拝に宗教的色彩なし」とした。もっとも、現場の宮司は「神社で祈願祈禱を行うなどはけしからん」といつていたが。日韓併合後、生産の場を奪われた朝鮮人の満州、日本への移住が進んだ。カナダ長老教会ミッションのL.L. Youngは、ほどなく満州で朝鮮人伝道を始め、27年には神戸へ移って在日朝鮮人伝道に携わるようになった。

### 2. 日中戦争開始前後の日本のキリスト教会

1931年柳条湖事件が起きた頃、在日朝鮮イエス教会は教会39を持ち、在日朝鮮教会は教会46、信徒2412人であった。この頃はまだ、日本と朝鮮のキリスト者の交流が可能で、33年には、関西地方神学生会が京城など朝鮮各地で夏期伝道を行い、横浜神戸大阪より学生を中心に全朝鮮勸励会に参加したこともあった。しかし34年には文宗洙の「朝鮮民族と基督教」(続)が、『基督申報』に掲載禁止となるなど、徐々に時代状況が変わっていった。

1935年2月天皇機関説が貴族院で問題となる。共産党だけの弾圧から、自由主義も危険視されるようになり、8月「国体明徴声明」が出され、9月には美濃部達吉が貴族院議員辞職した。「天皇制下の全組織が公然と組織的に、当然の職務として『異分子』の排除の実行にかかったのである。右翼ももはや安全ではなかった。宗教もねらわれた。」

この年11月、総督府は平安南道公私立中学校会議招集、平壤神社参拝を命令した。これを拒否した(北米長老教会系)のマキューン崇実中、スヌーク崇義女子中校長職認可を取り消した。1936年8月2・26事件に関連したとされた南次郎が総督に着任し、早々に神社制度に関する勅令を5件発令し、国弊社を頂点とする神社体制の確立を計った。9月には愛国日を制定した。このような状況の中で、37年2月南長老派ミッションは神社参拝強要下での学校の閉鎖を宣言する「フルトン声明」を出した。1中学、9小学校、崇実専門学校などが閉鎖された。7月盧溝橋事件勃発を契機に内鮮一体化がすすめられ、神社参拝、宮城遙拝、国旗掲揚、皇国臣民誓詞斉唱、勤労奉仕などの月例行事が強要されるようになった。朝鮮人牧師20余人が東方遙拝拒否で処罰され、修養同友会関係者が治安維持法違反で150人検挙され

た。

神戸神学校を卒業した林沢権は1917年から神戸で集会を始め、21年神戸教会が設立された。同年の大阪東部教会設立など日本各地で朝鮮教会が増え、38年、在日朝鮮基督教会の日本基督教会加入の議が起こった。非公認宗教の扱いで、不利益を受けることを回避するためであった。日本基督教会大会議長富田満が訪韓し、儀礼としての「神社参拝」を勧めたのもこの年6月であった。9月には、総督府は反対派牧師を拘束し、100余名の警官陪席朝鮮耶蘇教長老会で「神社参拝」決議をさせた。日本国内では39年6月に灯台社の91名が検挙されたのを初めとして、40年には救世軍スパイ事件、42年ホリネスの96名検挙、43年にはセブンスデーアドヴェンチスト39名の検挙など次々と起こった。

3. 中央(神戸)神学校、朝鮮基督教(会)、日本基督教団 朝鮮での崇実専門学校などの閉鎖に伴い、中央神学校への留学生が増加した。1937-41年の留学生は36人で、全卒業生388人の内、留学生総数80人のほぼ半分にあたる。神戸神学校の朝鮮人卒業生は、朝鮮と在日朝鮮教会の牧師になった。神戸神学校自身も、41年「宮城遙拝」の徹底通達で閉校を決定した。この最後の卒業式直後留学生が刑事に連れて行かれたという。

1938年日本基督教会への加入に際し、朝鮮基督教会は①国語使用条項の削除、②朝鮮基督教会牧師資格の継続、③朝鮮基督教会を一つの中会として加入させることなどの条件を出したが、日本基督教会は、政府の宗教統制の指針にそってこれらの加入希望条件を総て拒否した。40年朝鮮基督教会はこれを飲んで日本基督教会の該当する中会へ加入手続きを取った。他方、42年6月には日本基督教団が設立され、43年には部制が廃止された。国家からの独立を主張していた日本基督教会の伝統は、見る影もなく壊れており、41年頃から各地で起こった、神社参拝拒否、治安維持法違反を名目とする朝鮮人キリスト者、牧師の逮捕、教会廃止命令に対して、日本基督教団はなすすべを知らず、何の助けにもならなかった。

4. 田中剛二(1899-1979)、林田教会主管代務者着任

牧師の息子であった田中は、早稲田中学在学中に労働運動に関心を持つようになり、退学して鉄工所に就職、さらに朝鮮銀行奉天支店に勤務してロシア

への入国の機会をうかがっていた。しかし特高につきまとい断念、神戸神学校へ逃げ込んだ。同級の赤岩栄と一緒に授業をサボることが多かった。ある日、フルトン先生に「授業に出ると、体操を見るのと、どちらがあなたの義務ですか」と問われ、「この先生は神さまの前で生活しておられる」と田中は物凄いショックを受けた。これがカルヴィニストへの回心であったと、田中自身が回想している。1926年卒業の同級には、終生の友であって在日朝鮮人教会の伝道に携わった金禹鉉がいる。田中は高知教会副牧師を経て、1940年1月神港教会牧師となった。10月の「合同問題に関する決議案」を議した日本基督教会大会では、「信仰告白による一致」等の付帯条件をつける修正案の要求者の一人であったが、これは否決された。

戦時下の神港教会は、出征や疎開で会員の出席が減っていたが、礼拝はキチンと守られた。田中の説教はひたすら聖書テキストの講解であったが、よく「なぜ、キリストのご支配が現実とならないか」と問いかけという。当時の出席者はそれを心深く受け止め、先生は「キリストの再臨と神の国の完成を望みみて喜びに溢れた説教をした」という。もちろん、憲兵が張り付いて説教メモを取り、宮城遙拝実行のチェックに及ぶこともあった。「今日はギリギリだった」と、福田長老が宮城遙拝をリード、その後田中牧師が講壇に上がって礼拝を始めた様子を、礼拝から戻った会員が家族に話したという。田中は飛行機献金の取り次ぎもした。しかしそれを教会の決算には計上しなかった。ある意味姑息なやり方に見えるほど細心の注意を払って政府の命令に服して、田中は神港教会をまもり続けた。

ところが、44年6月末林田(教団編入によって神戸教会から名称変更)教会牧師の朝鮮への強制帰国の後を受け、田中が代務者に就任することになった。アナーキストで、奉天にまで行った要注意人物田中の朝鮮教会代務者就任は、田中にとっても教会にとっても危険な選択だったのではないかと。神港教会の朝礼拝を9時に変更し、林田は11時とするなどして、田中は完全に二つの教会の礼拝、長老会、祈祷会の責任を持つようになった。林田教会では礼拝を日本語でしか行えないため、予め渡した説教原稿の韓国語訳が聴衆に配られた。ただ、祈祷会での祈りについては「僕が責任を持つ」と、母国語の祈りを認めた。これだけが彼がとった小さな「抵抗」であっ



た。「保守的信仰者グループ」の「信教の自由」では、結局自分たちの教会を守るだけで精一杯で、国家権力に対しては服従するだけなのか。信仰の論理に政治的抵抗の芽はないのか、この課題が私に残された。

## 5. 政教分離と「全世界を統べたもう神」

1946年4月、常葉隆興、岡田稔ら数名の教団を離脱した牧師を中心に、日本キリスト改革派教会が発足した。日本基督教会の再建を願っていた田中は1948年ようやく改革派教会に加入した。翌年、神戸改革派神学校歴史神学教授就任し、「カルヴィンとセルヴェート焚刑」と題する講演を行い、カルヴァンのセルヴェート焚刑におけるように、国家が宗教的権能を持つことを斥けた。続いて第四回大会で、ウェストミンスター信仰告白第23章第3節（教会と国家の関係についての規程）を1787年の「アメリカン・リビジョン」と取り替えることを提案し、可決された。彼は、国家権力が「ある信条または宗教を許す」というような「宗教的寛容」を根本的に否定した。なぜなら「宗教的自由は国家以前の、人間に本有な、神の創造に基づく権利」だからである。国家の任務はこの権利を擁護する以外にないと主張したのである。

ならば、宗教的「中性」国家は、宗教の真理とは無関係か。むしろ田中はそうは考えない。むしろ彼はカルヴァンに従って「神の栄光が統治の目的となされるところには、合法的な正当な主権はありません。あるのはただ篡奪だけです」とさえいう。なぜなら「神はこのキリストを立てて全世界を統べ治めたもうのであるから、世界の一切の栄光の上に高くそびえ立ち、いっさいの権力の上に敵するものがないように至高に立たねばならない」からである。キリスト者自身も、政治権力者も共に、「頼るべきどのような価値も功績もない全くの悲惨な罪人」にすぎず、ただ至高なる神のみ旨に従うことのみが求められる。田中は、このような神の前に、キリスト者一人一人を立たせた。朝鮮基督教会において、母国語での祈りを勧めたのも、神に従うものの最重要事である神への祈りを人が妨げてはならないとの立場からであったろう。一人の人が神の前に立ち、神と交わる祈りの時を田中は護った。徹底した「政教分離」と、至高なる神の前に等しく立つ僕として、田中はウルトラナショナリズムの呪縛を越えたといえよう。

## 凜とした教育者・伝道者 小宮珠子

伊藤 泰子



1845(弘化2)年4月4日、中津藩奥平家の儒学者瀬川剛司(養浩)の長女として江戸汐留の藩邸で生まれる。9歳の時に母を亡くし、弟の浅(あさし)とともに継母に育て

られる。藩主から表彰されるほどの良い継母であったが、「本当の母親だったら」と思うこともあったようだ。儒家の家に生まれたため幼いころより漢籍を学び、父親や父親の友人たちから多くを学んだ。父の所蔵していた浄瑠璃の本を読みふけていたこともあった。また父の死後、伊達家につかえていた叔母の袖浦に養われ、その部屋子として厳格な教育を受け、裁縫、花道、茶道に至るまで女性として身につけるべきことを授けられた。その後の教育者としての基礎を築いたと思われる。

縁あってある旗本に嫁ぐが離別し、その後志を立てて子女の教育を目指すことになる。1877(明治10)年32歳の時、東京府小学校教員の検定に合格し、本所区カマヤ堀の小学校に勤務し、1879(明治12)年には、深川区東川小学校に転勤になった。その頃、弟の浅が、長崎で学問を修めている間にキリスト教に出会う。彼は、改革派(カルヴィン派)であったが、お姉さんである珠子にまず伝道した。1880(明治13)年1月3日、珠子34歳の時立教女学校(米国聖公会)に就職。6月28日神田キリスト教会でブランシェー長老より洗礼を受け、同日、ウィリアムズ監督より信徒按手式を受けた。

アメリカ人宣教師たちからの信頼も厚く、弟浅の妻の死により、浅の子供たちの世話をするために一時学校を離れたときには、当時の第4代校長ミス・リディックは、米国聖公会への手紙の中で何度も珠子の帰校を望んでいる。浅の新しい妻は聖公会の信徒で、立教女学校で教育を受けていたが、卒業を待たずに浅に嫁ぎ、珠子は再び教壇に戻ることになる。

その頃の立教女学校は教師の多くがアメリカ人宣教師であり、授業はすべて英語で行われ、地歴は西洋のものだった。珠子は、日本の婦人を教育するの



に日本のことを教えなくてははいけないと強く主張し、ヘーア監督の時に改革が行われた。財政的に独立し、日本人の手による日本の教育を行うこととなった。珠子は、当時立教大学在学中の石井亮一に、日本人として初めての校長を要請するが、石井は、清水友輔を推薦し、自らは教頭として尽力することになる。のちに石井は、滝乃川学園を創設することになるが、この創設に際しても珠子はサポートし、二人の協力関係は最後まで続くことになる。またこれに伴って、珠子は、日本史略、日本外交史、国史略などを教えるとともに、また幹事として、生徒数もまだそれほど多くない中で経済的にミッションから独立し困難が多かったと思われるが、支払いを怠ることなく経営手腕を発揮したことが伝えられている。

珠子の信仰心の篤さは、前日どのように遅くまで起きていても当時の教師たち一松原昱子(のちの名出保太郎監督夫人)、林歌子(のちに博愛社に生涯をささげた)とともに早朝、学校のため、世界平和のため、卒業生一人一人を思いながら祈りを捧げていたことからわかる。

生徒たちにとってはコワイ、厳しい先生である反面、母親のような心を持って接していた。生徒たちの小遣もきちんとノートにつけさせて無駄遣いをさせず、余ればそれで着物を作ってあげたりした。母親のいない生徒が嫁ぐ際には、嫁入り支度すべて整えてやり、熊本の嫁ぎ先にも立ち寄り、いつまでも心にかけていた。持病のある生徒には卒業後もしばしば見舞い、枕元に手をつけて長い黙祷を捧げていたと言われる。また、看護師となり、聖路加国際病院に勤務していた卒業生は、その英語力を買われて、横浜にいた米海兵大尉夫人の出産の手伝いに派遣され、気に入られてその後 15 年間もその一家の子供たちの世話をし、その後ワシントンのコロンビア病院で勉強をしておし、85 歳までその病院で働いた。その彼女は、「お世話になった小宮先生の愛情あふれる真心に感謝して、恩師名義の奨学金を作ってほしい」と、つつましい生活の中からコツコツと蓄えた貴重なお金を持って、海兵大尉の長女に付き添われ 1964(昭和 39)年に母校を訪れた。現在もこの奨学金は多くの在校生たちに役立てられている。

少ない奉給の中でも、時間のある時は伝道のために各地をまわり、台湾伝道にも積極的であった。台湾の伝道師の一人は卒業生である。「メリーの友」という伝道補助団体の組織に関わり、マキム監督夫

人のあとを受けて、北東京地方婦人補助会会長となる。この婦人補助会の役員の数多くに立教女学校の卒業生が名を連ねている。交通機関もまだ整っていなかった時代に、珠子は日本国中だけでなく、高齡になってからも台湾にも出かけていた。82 歳の頃、資産はすべて学校、滝乃川学園、博愛社、教会に寄付し、1928 年(昭和 3)年 2 月 26 日、83 歳の生涯を閉じた。

日本人の教育は日本人の手で行うべきだという信念のために生涯を捧げた人であった。

### 【編集後記にかえて】

次号に石川潔さんを偲んでということで、どなたかに執筆をお願いしたいと思いますが、会報の発行が迫っていますので、編集後記にかえて、一言述べさせていただきます。石川潔さんが去る 9 月 16 日(火)午前 1 時 40 分に逝去しました。石川さんは、1958 年に明治学院大学経済学部を卒業後、白洋舎に入社、創業以来キリスト教を基本とした経営に魅力を感じて受験したそうです。石川さんには特技があり、「八いろとんがらし」というものを作って、商標登録もしていました。28 種類の香辛料を調合し愛用者に送付、その数は一時 240 名にのぼり、無料で配布していました。しかし返事が来ない場合は、郵送はストップされます。

1998 年に石川潔さんは、横浜プロテスタント史研究会に入会しました。ヘボンに関心強く、白洋舎に勤める傍らヘボン研究に勤しみ、当研究会におきましてヘボン関係の発表を中心に病気を抱えながら 6 回もして下さいました。

1999 年に『ドクトル・ヘボン関連年表—1815. 3. 13~1911. 9. 27 (ヘボンの誕生からヘボンの葬儀、追悼会の日まで)』(163 頁)を出版しました。2000 年 10 月の例会において、『ドクトル・ヘボン関連年表』をつくってというテーマで発表しています。続いて 2003 年 3 月「旧幕臣新撰組出身・結城無二三」、2006 年 10 月「ドクトル・ヘボン神奈川宿での 1169 日」、2007 年 6 月「横濱居留地 39 番でのヘボン」、2008 年 7 月には『聖書和訳で活躍する「医師・ヘボン」』を発表されました。そして最後の発表は、2013 年 9 月 21 日の例会でした。入院先の病院から指路教会に駆けつけて、「クララとヘボンのヘボン塾」を発表しました。この日は同窓生が大勢出席して、全体で 50 名を越えました。ヘボンの文献を求め、正確な歴史叙述をモットーにユーモアを交えて発表して下さいました。を思い出します。(岡部一興記)